

養成段階における俳句指導のための基礎力形成に関する一考察  
— 2年間の「KODOMO俳句」をめぐる討論と句会を通して —

A consideration of building basic skills in Haiku instruction in a teacher training program  
— Through classroom discussions and experience of "Kodomo Haiku" in two years —

今野 和賀子  
Konno Wakako

キーワード：「KODOMO俳句」、鑑賞と俳句創作

Keywords: "Kodomo Haiku", appreciation and creation of Haiku

### 要 約

本研究の目的は、養成段階における俳句指導のための基礎力養成の方途の一端を明らかにすることである。方法は、2年間のゼミナールでの「KODOMO俳句」をめぐるディスカッションと、年4回の俳句創作・交流を行う中で実施した振り返りアンケートの分析を試みた。結果、俳句への親しみや鑑賞力、表現意欲や話し合い技能等の高まりが見られ、俳句創作とKODOMO俳句の鑑賞との往還による授業づくりのための基礎力形成の可能性が示唆された。

### 1 はじめに

現行国語教科書においては、児童は小学校3学年で初めて俳句に出会い、高学年で日常の出来事などを俳句を作る学習を行う。これらは平成29年告示学習指導要領の〔知識及び技能〕(3)「ア 易しい文語調の短歌や俳句を音読したり暗唱したりするなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと」(3・4年)、(1)「ク 比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと」(5・6年)等の指導事項、「書くこと」の言語活動例「イ 短歌や俳句をつくるなど、感じたことや想像したことを書く活動」を受けている。

全国の小学5・6年生が俳句を作るわけだが、その作り方として教科書に示されているのは歴史的著名俳人の例にならって書くものや、「取り合わせ」の方法で作っていくもの、児童が作ったいくつかの句のおもしろさを話し合うところから始まるものなど様々である。

昨今、マスコミの介在が大きな働きをして、「俳句ブーム」が国内外に急速な勢いで広がってきている。とはいえ、当該年に数時間程度で触れる俳句を身近に感じる状況というのは生まれにくい。

一方、指導者側の問題としても、俳句にどれだけの指導価値があるか分からないとか、俳句に関する知識と作句キャリアがなければまともな指導はできないと消極的になりがちな面がある。指導者自身、俳句の解釈はできても、俳句づくり体験が十分でないことからくる指導への不安が積みまとう。

藤井園彦氏(2008)は「俳句の読み方も作り方も知らない教師が、児童生徒に俳句を作らせる」実情を踏まえ、「俳句の持つ教材性を生かして国語の力をつけていかなければならない」とする。藤井氏の、小学6年間への俳句指導法の提案及び授業報告は実践の参考になる。また、青木幹勇氏(2011)は俳句を作らせるとき「ぼくにもできそうだと感じられ、子どもの詩心をゆさぶる作品、子ども独自の発想・着眼・表現による作品を教材にしたい」とし、子どもの作品を教材とした俳句の授業を報告している。さらに中島賢介氏(2008)は、俳句創作指導の課題を、① 指導者の俳句に対する先入観や偏見、自信のなさ、② 俳句の授業が鑑賞中心で創作指導を行う時間が確保できないこと、③ 教科書

が名句中心で創作指導に不向きであることを挙げている。

このように、俳句指導には幼・小・中・高を見通した系統的指導を可能にする付けたい力の明確化と指導計画及び適切な教材、さらに指導者の指導観などの問題などが絡んでいる。

そこで、専門演習（ゼミナール）の一環として、以下の二つの活動に取り組む。一つは、1回15分ずつ年間30回を通じた「KODOMO俳句」（読売新聞日曜版 選者高柳克弘氏による小学生の優秀句4句及び評を掲載）記事をめぐるディスカッションの設定である。二つ目は、年4回の句会の設定である。この二つを年間を通し継続的に取り組むことを通して、小学校教員を目指す学生たちが俳句のもつ楽しさを味わい、俳句指導のための基礎力を養うことができるのではないかと考えた。

「KODOMO俳句」の記事を取り上げる主な理由は、以下の三点である。

- ① 今の小学生の俳句と選者の評から、俳句創作や鑑賞の在り方を学び、俳句に親しむことができる。
- ② 課題として適切な分量の文章作成とゴールの明確な話し合いを設定でき、楽しさを実感できる。
- ③ NIEの一環として、教員になった際の教材研究や教材開発の素地を養うことができる。

## 2 方法

### 2.1 研究の対象

本研究の対象は、2018～2019年度リエゾンゼミⅡ～Ⅳの2年連続受講学生計21名である。

### 2.2 「リエゾンゼミ」における実践の概要

(1) 2年間継続的に、ゼミ冒頭の約15分で

「KODOMO俳句」記事から各自が選んだお気に入り句ディスカッションを行う。

① 記事を基に作成したシート様式（図1）

でA～Cの課題から一つ選んで取り組む。

- A) お気に入りの俳句の理由と感想
- B) お気に入りの俳句の作者への手紙
- C) お気に入りに関連させて詠んだ俳句

② ディスカッションを行う。

「お気に入り俳句紹介と一押し俳句決定」

ア) 司会は各自のお気に入り俳句を挙手によって確認する

- イ) 全員が選んだ理由と感想を発表する
- ウ) 票が多かった句の魅力を一層際立たせ

たり、少なかった句の新たな魅力を掘り起こしたりして価値付けを行う

エ) 「今週の一押し俳句」を決定する

(2) 四季折々の風景や思いを俳句に詠む活動に年4回取り組む。句会を開き、感想交流を行う。

(3) 2年間前期と後期の終わり（7月・1月）に、「活用振り返りアンケート」調査を行う。方法は、アンケート用紙を配布し、20分程度で記入し、その場で回収する。

### 2.3 実践の経過

1年目第1回の講義で、年間を通した取組として「KODOMO俳句」ディスカッションを行うことを伝え、実践について了承を得た。NIEノートを見開きで使うこととし、右ページに「KODOMO俳句」シートを貼って、翌週の話合いや紙上コメントを通して各句の特長や良さを洗い出した。

評	俳句 ①	* 季節や俳句に関する選者の総評	KO DO MO 俳句
	俳句 ②		
	俳句 ③		
	俳句 ④		
		A: お気に入り句の理由・感想 B: 作者への手紙 C: 関連させて詠んだ句	
		コ メ ン ト	

図1：「KODOMO俳句」シート様式



図3の学生の意識変化において、2019年7月に（ウ）俳句指導への抵抗感の値がやや下がっている原因として考えられるのは、2年目から付加した春・夏2回の作句体験である。それ以外の条件に変化を加えてはいないからである。作句が加わったことで、それまでの子供俳句がいかに言葉を選び的確に表現されていたかを体験的に理解し、鑑賞に作る側からの視点を加えたことが、俳句指導に対する抵抗感を押し上げた可能性がある。

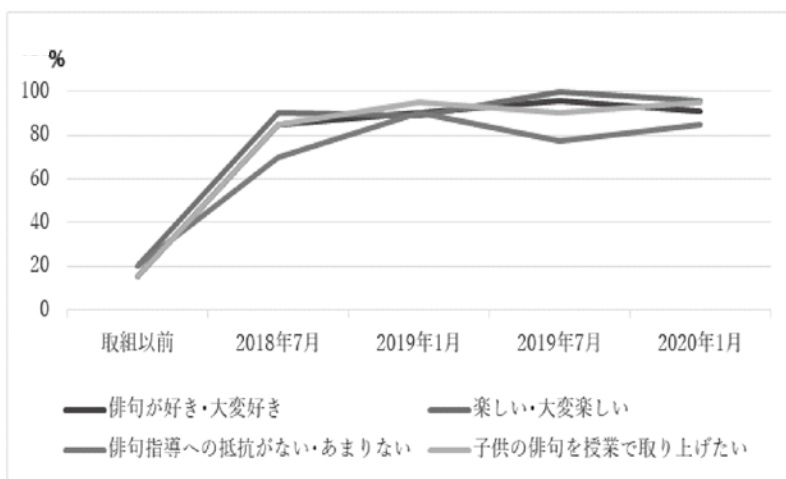


図3：2年間の取組における学生の意識変化

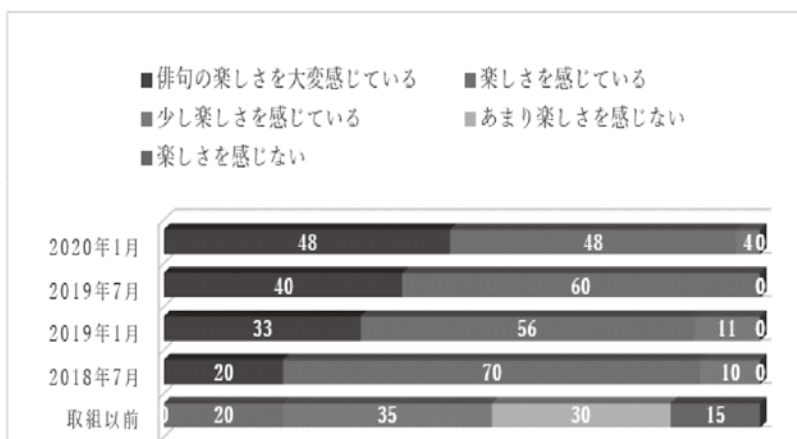


図4：俳句の楽しさの実感に係る意識の変容

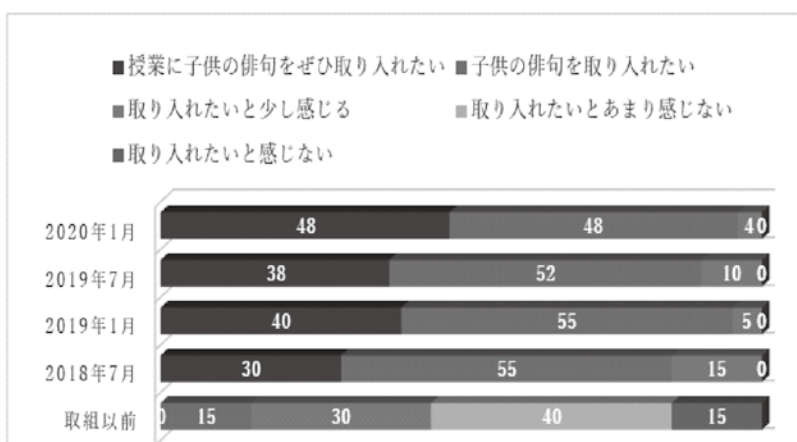


図5：子供の俳句の授業活用に係る意識の変容

7月に「楽しい・大変楽しい」が100%に上昇したことは注目できる。みんなで俳句を作りみんなで選ぶ際、批評し良さを発見し合う話合いが楽しさの実感につながったと捉える。

特に、大項目1の(イ)俳句の楽しさに関わる意識の変化を取り出して示したのが図5である。取組以前「(あまり)楽しさを感じない」が45%を占めたが、3か月で大きく変容し、2年目に俳句作りが始まってからも、「楽しさを大変感じている」割合が順調に増え続けている。1年目の「少し感じている」が2年目には0%となり、俳句作りを通して一層心から楽しさを感じるようになっていくことが分かる。さらに質的变化については、他の設問の結果や個別の変容を詳しく見る必要がある。

次に、大項目1の(エ)「授業に子供の俳句を取り入れたいか」についての推移をまとめた(図5)。

取組以前は「取り入れたいと(あまり)感じない」が過半数を占めたが、3か月で大きく変容し、「授業に子供の俳句をぜひ取り入れたい」の割合が伸びている。

また特筆すべきこととして、項目(イ)俳句の楽しさと(エ)授業で子供の俳句を取り入れたい思いの間には、高い相関関係が見られたことが挙げられる。



### 4.1.3 「KODOMO俳句」課題に対する取組

表1に「KODOMO俳句」課題に対する取組やお気に入りの決め方を類別してまとめた。1年目と2年目で、傾向に大きな変化は見られない。全体的話し合いにストレートに生かしやすいのが、ア) お気に入りの理由・感想であったことは論を待たない。

アンケートからお気に入り句の理由・感想は最も書きやすく、その後の話し合いの深まりを期待したからなどの理由が明らかになっている(表2参照)。ウ)の関連俳句作りについては、2年目5%

表1 「KODOMO俳句」課題に対する取組の内訳

①「KODOMO俳句」課題で多く取り組んだこと	ア) 気に入った理由感想					
	イ) 作者への手紙	ウ) 関連俳句作り				
19年1月	85	15	0%			
20年1月	81	14	5			
②お気に入りの決め方(複数回答)	ア) 追体験し共感できる		イ) 新鮮な感覚に開眼		ウ) その他	
	19年1月	87	100	10		
	20年1月	62	76	5		

という結果や、その難しさに触れた感想「試みたが、子供の句に及ばなかった」「添削している感じになってしまった」など、検討の余地を残した。

表2 課題への取組に関する自由記述の比較 a

項目	選択肢	2019年1月	2020年1月 *①②等は実人数
①「KODOMO俳句」3課題のうち多く取り組んだものとその理由	理由と感想	ア) 自分の素直な気持ちや解釈を書くので書きやすいから⑤ イ) ゼミの話し合いに最も役に立つから③ ウ) イメージや作者の気持ちが自分と照らし合わせやすく表したかったから② エ) 評価の練習になると思ったから② オ) 俳句を始めたばかりで感想を書くのが精一杯だったから②	ア) 最も取り組みやすいから③ イ) ゼミの話し合いに生かしやすいから⑤ ウ) 作者を想像し感想を書くのが楽しく交流を行うことでより楽しめるから④ エ) 先生のコメントを練習したかった③ カ) 感想を書くことでその句の良さが見えてくる気がしたから③
	手紙	キ) その子の気持ちを考えて手紙を書くのが楽しかったから①	ク) 直接感想を伝えたかったから① ケ) 情景や作者の日常を想像したかった①
	句作	コ) 自分で俳句を作ってみたかったから①	ク) 自分で俳句を作ってみたかったから①
② お気に入りの決め方	その他	サ) 小学生らしい視点や子どもらしさ④ シ) 情景が鮮明に思い浮かべられるもの①	サ) 今はもう感じられない子供ならではの視点や気づき、新鮮な表現⑤

### 4.1.4 「俳句」「俳句指導」に関する意識の変容の記述面からのアプローチ

#### 「KODOMO俳句」の取組における学びや楽しさについて

取組を通じた学びと楽しさをまとめたところ、いずれも内容は「俳句の味わい方」「話し合い」「司会」の三つに類別できた。つまり学びと楽しさの枠組みは同様だった。ここでは学びに関する自由記述の内容を示す(表3)。異同が分かるように、キーワードごとにアイ・・・と細かい類別を施し、類似・発展していると思われる内容に+を付した。

学んだことは、「A作句」「B季語」「C生活への着眼」の三つに大別できた。「A作句」に関しては、身の回りのささいな出来事や日常をも詠めることや、俳句の種と季語の関係を考慮して作ることなどが半数を超えた。「B季語」に関しては、季語の多様性や適切な選び方について、「C生活への着眼」では季節感を五感で感じながら生活を送るようになった変化が示された。

楽しかったことは、「A作句・共有」に集約された。俳句から詠み手のエピソードや思いを想像し言い合う中で意外な内容がありワクワクしたこと、わいわい言いながら俳句の種探しに外へ出て発見したことなど、取材や句会でのコミュニケーションこそが楽しさを牽引しているといえる。

表3 「KODOMO俳句」による学びに関する自由記述の比較 b

項目	キーワード	2019年1月	2020年1月 *下線は今野による
1③ 学んだこと	A 俳句の味わい方	ア) 一つの俳句でも様々な捉え方があり、新たな気づきや深まりが生まれた⑦ イ) 新鮮な子供の感性③ ウ) 様々な角度から物事を見る重要性② エ) 「評」からの学び① オ) 良さを効果的に伝える伝え方①	ア+) 自分とは異なる読み方に出会い、俳句の面白さや興味がより深まったこと⑨ ウ+) 選ばれない句でも様々な視点から捉えて話し合えること① カ) 俳句で言葉をどこに置くかで俳句のイメージが変わること①
	B 話合い	キ) 個の意見発表に加え、新たに考えを生み出し、より深い対話をしていくことの良さ④ ク) 選んだ理由に人柄が表れ、新たな面を知ることにつながる①	キ+) 他の考えをよく聴き、それを受け異同を明らかにして自分の意見を述べ深めていくこと④ ク) 討論から一つに絞る話合いの流れをつかむことができたこと③
	C 司会	コ) 様々な考えをつなげたりまとめたりする方法や話しやすい雰囲気作り④ カ) 視点を絞ったり具体的な着眼点を与えたりすると討論が進むこと③ シ) キーワードを捉えて切り返す技術①	コ) 参加者の話しやすい場の流れの作り方① コ+) 結論の導き方を考えながら <u>相違点等を関連付け重要な着目点を拾って考察を深めていくと新しいものが見えること⑤</u> シ+) <u>臨機応変な切り返し発問など指導法と結びつけて考えられたこと④</u>

今後取り組みたいこととして、共通の季語や表現技法で作る俳句、グループ俳句等が出された。場面の切り取り方や比喩、語順など、表現を磨くための方途や協働性への方向性が示唆された。

## 4.2 個の意識の変容に着目した振り返りアンケート内容の比較・考察

### 4.2.1 成果

以下の表4のとおり、2年間を通し3人に共通するのは、1年目の「KODOMO俳句」の話合いの取組においては、「話す・話合い技能の高まり」と「俳句の感じ方の多様性と楽しさの実感」が相前後して自覚されること。2年目では、「季語」意識の深まりと「読み手を強く意識した句作に対する姿勢や自信」を持つようになってきていることである。

1年目のKODOMO俳句討論では、共通の言葉の選択や技法を根拠に挙げつつ、それぞれが異なる読み味わい方をしていることがおもしろかったということである。この楽しさは多様な解釈を可能にする俳句ならではのおもしろさである。古典導入の一つとして、口語訳付きで紹介される古めかしいイメージの俳句観を覆すものでもあっただろう。KODOMO俳句の基底に流れる子供らしい感性と言葉の選択等に対する驚きについては、表1・2でもふれたとおりである。

子供の俳句をどのように受け止め味わうかは読み手の想像力が試される。世界最短の詩である俳句の特徴の一つは、解釈の多様性である。作者の手を離れた俳句は、その瞬間から読み手の解釈に委ねられる。読み手は、作者の意図以上のものを作品から読み取り、さらに作品を豊かにする。異なるイメージを突き合わせる話合いは、司会の深め方によっても解釈の方向性や着地点が異なる。それが、KODOMO俳句を通した学び、すなわち「司会」のまとめ方や進行の仕方として意識され、俳句指導場面における教師の働きかけの想起につながっている。

俳句の創作が加わってからは、まず「季語への着目」に共通して焦点が当たっている。俳句にとっての季語の働きの重要性和バリエーションの豊富さに感嘆の声を漏らし、さらに句会交流で自ら詠んだ俳句を複数のメンバーに気に入ってもらったり、気付かなかった魅力を引き出してもらったりする体験を繰り返す中で、より読み手を意識した質の高い作品を目指すようになっていった。自分自身の俳句作り体験と、子供俳句の魅力を引き出す話合いの往還を通して、鑑賞力や創作力を高め、授業者の目をもって俳句指導の方策を考えるようになっていったと考える。

表4 抽出した3人の記述内容の変容

\* 俳句及び技能に係る部分に下線。話す・話し合う技能関連の内容を◎で示した。

Aさん < → 1年目は主に発表や司会技能, 2年目から俳句を通した学びや俳句指導にシフト >							
2018.7		2019.1		2019.7		2020.1	
子供俳句	◎最初はかなり消極的だったが、次第に <u>能動的に発言</u> ・行動できるようになった ◎司会を通して様々な考えをつなげたりまとめたりすることの難しさと上手くやっていく工夫を学んだ	◎ <u>意見集約</u> や改めて全体に投げ掛ける方法、一つのテーマ・観点を <u>広げていく術</u> を、上手にまとめている人や自分の失敗などから学んだ ・自分にはない感じ方	・子供俳句の見方が変化し、捉え方が人によって異なると感じられる句を選ぶようになった ・感想がパターン化したため、新たな表現や語彙を模索し <u>文章力</u> が付いた	◎様々な表現の工夫から <u>論点を絞る</u> 考察を深めると新しいものが見えてくる ・俳句の良さだけでなく、授業を行うとしたら <u>どのよう</u> に俳句を扱っていくか <u>か</u> を考えることができた			
作句		・捉え方を知れた。十人十色の感想を聞くのが楽しかった	・俳句を作るときの意識が変わり、知らなかった言葉や <u>新しい視点</u> を知ることができて楽しかった	・読み手の <u>想像を強くかき立てるような作り方</u> ・みんなが俳句を <u>豊かに想像し表現する力</u> が付いた			
Bさん < → 一貫して俳句の表現技法や教材性への開眼, 深まりが創作の自信につながる >							
2018.7		2019.1		2019.7		2020.1	
子供俳句	・評の想像豊かな読みから <u>俳句の深さ</u> を学んだ ・読み手によってイメージが異なることに大変ワクワクした	◎司会のまとめ方や話しやすい雰囲気作りの仕方を学んだ ・ <u>意外な言葉の組合せ</u> で情景に厚みを持たせた俳句が面白い	・他の人の考えを聞いて <u>異なる視点からの見</u> を知ることができた	・語の <u>配置</u> を換えると俳句のイメージが変わる ・良いと思う箇所や想像した情景がそれぞれ異なりおもしろい			
作句	・俳句に真剣に向き合っているいろいろな技法や表現を知った。俳句は気持ちを素直に表現でき、おもしろい	・漢字や平仮名・片仮名等の <u>表記の違い</u> で、句の印象が大きく変わることを知った	・季節ごとのいろいろな <u>季語</u> を知ることができたのがおもしろかった ・ <u>季重なり</u> という表現を知ることができた	・句い・温度・色などが感じられると、読み手の共感を得る俳句になる ・子供俳句からもたくさんヒントをもらい、私も <u>作れると自信</u> を持てた			
Cさん < → 話し合い技能や表現力の高まり, 2年目から俳句創作技法(指導)をより強く意識 >							
2018.7		2019.1		2019.7		2020.1	
子供俳句	◎司会を含め <u>討論の方法</u> を身に付けられた ◎納得の得られる話し方を考え討論する ・同じ俳句でも人により感じ方が違うことを体験できた	◎司会の様々な役割について学んだ ◎人前で堂々と <u>話す力</u> が身に付いた ・俳句に対する異なる読みを交流することができて楽しかった	・討論を通して気付かなかったことに気付ける ・俳句を詠んだ子供を想像しながらコメントを考えるのが楽しかった	◎他の意見を生かし異同を明確にして述べ合う ◎伝えたいことを端的に <u>表現する力</u> が付いた			
作句			・ <u>季語</u> を意識しながら句作することで季節を感じることができ ・みんなで夏を探しに行き楽しく俳句を作れた	・ <u>12音(俳句の種)+5音(季語)</u> で俳句を作る ・季語の意味を捉え、 <u>俳句の種に感情を絡める</u> ・日頃から種探しをする			

当初俳句に対し興味関心が中程度だったAさんは、人前での発表や話し合いに苦手意識を持っていた。次第にKODOMO俳句に対する十人十色の解釈に楽しみを見出すようになり、2年目に入ると、KODOMO俳句に対する向き合い方や俳句の作り方が変化している。後半では、俳句の授業に思いを致

し、「座」の構成員としての自分たちの鑑賞力や表現力の高まりについて率直に述べている。

一方、興味関心がやや高かった**Bさん**は、一貫して俳句の表現技法や教材の価値について気付きを深めていき、俳句創作に対する自信を持つまでに変容を遂げている。当初から自分の心を自分の言葉で素直に伝える俳句の魅力に気付き、その内実を深めていったことが分かる。また、当初から俳句への関心が高かった**Cさん**は、1年目は話合い技能や表現力の高まりと多様な解釈のおもしろさを、2年目はより俳句創作技法や指導を強く意識するようになっていった。それは夏井いつき氏の句会ライブや講演を聴いて他のメンバーにその内容を伝えるなど、授業以外の積極的な取組にも表れていた。

ここで、**Aさん**の「みんなが俳句を豊かに想像し表現する力が付いた」という感想は、「私」だけでなく、みんな＝「私たちの」集団としての力の高まりの自覚であることに注目したい。俳句を作るに留まらず、その場で共有し、批評し合い、心から楽しむ。それら一連のプロセスの中で、「私たちの」言葉が生まれ、学習集団の質が自ずから高まっていった証である。それは「様々な表現の工夫から論点を絞り考察を深めると新しいものが見えてくる」といった表現にも表れている。

このように、言葉の学習において優れた教材性をもつ俳句は、言葉の力を付けるのみならず、学び合い心の通じ合う集団づくりに積極的に寄与する機能を蔵するといえる。

#### 4.2.2 課題

2年目の俳句創作導入に当たって、特に作り方を教えることはしなかった。専門演習であることと、KODOMO俳句の取組を経た上での句作であったためである。満を持してというわけでもなかったが、選択課題「関連させて詠む」よりもずっと抵抗感はなかった。ただし、「作り方を初めに学んでから取り組めるとよい」といった感想も聞かれた。

KODOMO俳句の理解・鑑賞から入って、創作に慣れる意味で量を増やし、さらに質を高めていくなど、カリキュラム構築の点からは多くの検討の余地がある。今後さらに授業づくりの基礎力育成の面から検討を加えていきたい。

## 5 まとめ

### 5.1 分析から明らかになった成果

今回、小学校教員を目指す学生たちが俳句のもつ楽しさを味わい、俳句指導のための基礎力を養うことを目指し、1回15分ずつ年間30回を通じた「KODOMO俳句」をめぐるディスカッションと、年4回の俳句創作・交流を加えて取り組んだ。2年間計4回の振り返りアンケートの分析から以下のような成果（変容）を得ることができた。

- ① 帯単元の有効性と可能性を確認できた。すなわちKODOMO俳句と優れた選者の評から、俳句鑑賞の仕方を学び、俳句に対する親しみや鑑賞力を増すことができた。
- ② 俳句を介したコミュニケーションの楽しさが言葉の学びを促進し、俳句創作とKODOMO俳句の鑑賞との往還によって、文章力や表現意欲、話合い技能等の高まりが見られた。
- ③ 季語を知ることで、自然を見つめ直す目が養われ、日常生活の中の些細な出来事や季節の移り変わりなどを五感で感じるようになった。
- ④ 3・5学年の教育実習で俳句の授業実践を行い手応えを得る、詩の鑑賞や俳句創作に係る教材開発や語彙指導等の工夫に挑戦する、俳句創作手法を俳人の講演から学び仲間と共有するなど、俳句を核として授業者としての視点をもった取組へと広がっていった。
- ⑤ 目的の明確な書く・話し合う等の言語活動によって楽しさに支えられた学び合いの手応えを実感し、他者理解や心の通じ合う集団が形成されることに気付くことができた。

## 5.2 今後の課題

最終アンケートでは今後取り組みたいこととして、共通の季語や表現技法によって作る方法や、グループで作るなどのアイデアが出された。場面の切り取り方や比喩、語順など、表現を磨く在り方や協働性を高めた活動にいかに関与させていくか、学生の主体的な取組を支援し模索していきたい。

歴史的な創作指導教材の点から見ると、例えば国定第4期「小学国語読本」（昭和8年～）巻9第11課に「雀の子」と題して一茶の俳句5句が掲載されているが、国定教科書5期までは全て古典としての読み方教材である。児童作文の教材化がなされたのは、第6期巻8（昭和22年～）で、子供の俳句20句が掲載された。

一方、芦田恵之助は「呉羽読本」（昭和16年）巻1「俳句問答」において、俳句とその作り方の見解を示している。芭蕉の弟子中川乙由の挿話や読本教材「雀の子」を例に、全文会話文形式で示され、具体的な教材開発の姿がみえる。また、自らの作文教科書『尋常小学綴り方教科書』第6学年（明治44年）第1課においても、同じ挿話を引いて文章は思うことを思うままに書き綴るものとしている。俳句も作文も内なる想を書き綴る表現学習として一貫したものと捉えていることが分かる。

俳句指導に当たって、十分に俳句に親しむ体験を盛り込み俳句創作と散文表現を組み合わせる活動から入るなど、系統的な俳句指導を可能にする帯単元や教科書単元との組み合わせによるカリキュラムについても今後検討する必要がある。

## 引用・参考文献

- 1 藤井園彦・習志野市立大久保小学校国語科研究部（2008）『言葉の力をつける俳句単元の計画と指導』明治図書pp11-30
- 2 青木幹勇（2012）『俳句を読む、俳句を作る』太郎次郎社
- 3 中島賢介（2008）「発達段階に応じた俳句創作指導法の研究」『北陸学院短期大学紀要40』 pp33-42
- 4 谷井紀夫（2011）「言葉を磨く、心を磨く一俳句指導を通して」日本国語教育学会編『国語教育研究』473号pp48-49
- 5 朝岡 剛（2012）「小学校における俳句創作指導の試み」『上越教育大学国語研究』26号pp14-21
- 6 藤田万喜子（2006）「俳句創作指導における実践と提案—取り合わせの方法を用いて（実践教育研究）」『岐阜聖徳学園大学国語国文学』25号pp69-77
- 7 西田拓郎・高木恵理（2012）『俳句の指導をたのしく深く』東洋館出版社
- 8 西田拓郎（2018）『俳句わくわく51！』岐阜新聞社
- 9 日本俳句教育研究会 三浦和尚・夏井いつき（2011）『俳句の授業ができる本 創作指導ハンドブック』三省堂
- 10 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』東洋館出版社 pp84.88-89.122.144
- 11 芦田恵之助（1941）「俳句問答」『呉羽読本』巻1第6『芦田恵之助国語教育全集』第4巻
- 12 棚田真由美（2005）「初等段階における古典の教材化に関する考察 —国定教科書の場合—」全国大学国語教育学会発表要旨集109号pp90-93